

2025年度事業計画

2025年度、公益財団法人泉屋博古館は以下の各事業を行います。

1. 保存公開事業

(1) 展覧会

前年度からの改修工事を終えて面目を一新する泉屋博古館(京都)は、以下のとおりリニューアル記念展および特別展・特集展示あわせて5件を行う。

1) 青銅器館

展覧会名	期間・日数
青銅器館リニューアル展 「中国青銅器の時代」 はじめて青銅器を観る来館者でも概要を一望できる構成とし、最新のデジタルテクノロジーも駆使して分かりやすく展示する。 第1室 青銅器名品選 第2室 青銅器の種類・用途 第3室 青銅器の文様・モチーフ 第4室 青銅器文化の東アジアへの広がり	4/26～8/17 9/27～12/14 (166日、うち22日は単独開催)
特集展示「殷周青銅器 解体新書(仮)」 殷周青銅器の鑄造技術について、台湾中央研究院・芦屋釜の里との共同研究の成果を第3室で特集展示する。	9/27-12/14 (68日)
開館日数計	166日

2) 京都企画展

展覧会名	期間・日数
リニューアル記念名品展Ⅰ 「帰ってきた泉屋博古館 いにしへの至宝たち」 新装記念第一弾は、当館が一貫して活動の核としてきた住友家伝来の美術品から精選。観る人の心に寄り沿う不朽の住友コレクションの奥深さに再び出会える機会となる。	4/26～6/8 (38日)
リニューアル記念名品展Ⅱ 「続・帰ってきた泉屋博古館 近代の美術、もうひとつの在り方」 住友コレクションを総覧する名品展の第二幕では、19世紀からはじまる近代の美術にフォーカス。展覧会や博覧会に出陳された作品、同好の士が集うなかで生み出された作品、そして屋敷を飾る調度としての作品など、作品自体の魅力とその制作背景を合わせて紹介。	6/21～8/3 (38日)
特別展「生誕151年目の鹿子木孟郎—写実絵画の精髓—」 近代洋画に本格的な写実表現を移植した鹿子木孟郎の生誕150年を記念する特別展。フランス古典派写実表現の系譜とその行方を、鹿子木と師・巨匠ローランスの作品を中心に紹介する。	9/27-12/14 (68日)
開館日数計	144日

京都展覧会費	30,446千円
--------	----------

泉屋博古館東京は、下表のとおり企画展5展を開催する。また住友財団の助成により修復された文化財の展示を春季展にあわせて行う。

3) 東京企画展

展覧会名	期間・日数
「花器のある風景」 日本における花器ははじめ中国から伝来し、中世以降様々な素材で花入が作られ、独自の美意識が誕生した。住友コレクションから花器と花器が描かれた絵画を紹介する。特集展示として、華道家大郷理明氏から寄贈された花器コレクションを展示する。	1/25 ～3/16 (44日)
「ライトアップ木島櫻谷Ⅱーおうこくの線をさがしに」 木島櫻谷の写生帖を増量して展示し、写生とタイアップした本画を紹介する。特に今回は人物画にスポットをあてる。あわせて前年に続き「四季連作大屏風」「秋草図屏風」を展示。 住友財団展併催：文化財維持修復助成作品	4/5～5/18 (38日)
「中国古代の神話とデザイン(仮)」 館蔵の青銅鏡の展示を中心に、中国古代の神話に基づく文様と、そのデザイン性の高さを分かりやすく紹介する。特に西王母と七夕の伝説を切り口として、日本の美術への影響を示す。	6/7～7/27 (44日)
「現代マイセンの磁器芸術ー巨匠ハインツ・ヴェルナーの描いた物語(メルヘン)ー(仮)」 ヨーロッパを代表する名窯マイセンは、日本においては初期の製品が人気を集めてきた。知られざる優品が数多く存在する1960年ころからの「現代マイセン」の代表作品を創出したハインツ・ヴェルナーに焦点をあて、マイセンの美しき磁器芸術を紹介する。	8/30～11/3 (57日)
「もてなす美ー能と茶のつどい」 住友家がもてなしの場で用いた能や茶の湯にまつわる諸道具を紹介する。能楽関係ではコレクション形成に大きく寄与した能楽師・大西亮太郎に注目。同時に茶の湯の友でもあった大西が参加した春翠主催の茶会で用いられた茶道具を展示する。	11/22～12/21 (26日)
開館日数計	209日

東京展覧会費	49,047千円
展覧会費合計	79,493千円

(2) 収集事業

当館コレクション充実のため、当館収蔵品と関連のある作品収集を継続する。近世末から近代にかけての絵画、工芸を対象とし、購入、寄託、受贈の検討を進める。本年度は、7代錦光山宗兵衛のカップ&ソーサーのセットおよび特に住友家旧蔵品であることが判明した尾竹竹坡の日本画1件の購入を実施したい。

(予算12,450千円)

(3) 修復事業

多くの当館収蔵品に修復の必要性が生じているなか、展示の機会を見据えて特に緊急性の高い案件を中心に作成した計画に従い、本年度は以下の修復及び調査を行う。(予算合計 15,006 千円)

- ・洋画 1 件 (ジャン=ポール・ローランス「マルソー将軍の遺体の前のオーストリアの参謀たち」) の修復 (予算 5,000 千円)
※2024 年度の事業だったが、作業遅延により継続案件とする。(2 月完了)
- ・日本絵画 2 件
 - －重要文化財「佐竹本三十六歌仙絵切 源信明」の修復 (予算 2,336 千円)
* 2 ケ年計画の 2 年目 費用総額約 6,832 千円 (引き続き国庫・住友財団助成申請予定)。修理報告書・動画コンテンツを 2026 年 3 月完成にむけ準備。
 - －伝東福門院作押絵軸「楊貴妃」の修復 (予算 2,680 千円)
- ・茶道具 (「芦葉達磨香合」付属品) の修復 (予算 500 千円)
- ・青銅器 1 件の修復 (予算 480 千円)
- ・洋画小修繕 (予算 500 千円)
- ・その他小修繕 (予算 700 千円)
- ・2025 年夏に館蔵品のガス燻蒸を実施予定 (予算 2,810 千円)。なお、従来使用してきたガス (エキヒューム s) の国内販売終了につき、現状で最後の文化財燻蒸となる予定。

(4) 館蔵品管理事業

- ① ポジデータのスキヤンや収蔵品の新規撮影など、2024 年度に導入した館蔵品データベースの充実を図る。またデータベースの公開に向けた議論を始める。
(3～5 カ年計画として)
- ② 2023 年度より泉屋博古館 (京都) で実施中の蔵書のデジタル化を本年も継続。その上で、上記①の図書台帳への内容反映を目指す。
- ③ 泉屋博古館 (京都) 改修工事にあたり、館外に移転していた一部の館蔵品を、館内の受入態勢および作品の保存状態等を鑑みながら段階的に戻し入れる。

2. 調査研究事業

(1) 館蔵品基礎調査研究

館活動の根幹となる館蔵品の基本的調査研究を実施する。

テーマ	期間
「茶道具の調査研究」 (森下) 館蔵の茶道具について、新収品を中心に、①付属品の再調査、②購入記録並びに茶会記との照合を行い、江戸期から大正期に至る茶道具のコレクション形成史をまとめる。	2020 年度より継続
「館蔵の洋食器を中心とした近代洋食器研究」 (森下) 明治時代以降、洋食器文化の輸入により日本各地で洋食器が生産されるようになった。住友コレクションには住友家の洋館で使用された、最初期ディナーセットなどがみられる。当時の国内における洋食器の供給ならびに需要者について調査を実施。	2021 年度より 5 年間

<p>「日本近代銅器の基礎的調査研究」（廣川・山本・竹嶋） 2024年度に受贈した日本近代銅花器について、基礎データ取得を実施し、その特徴を把握、また関連資料調査した成果を泉屋博古館東京での展示にて公開、あわせて図録を刊行する。</p>	2023年度より2年間
<p>「館蔵日本中国絵画の調査研究」（実方） 館蔵日本中国絵画に関して、調査データおよび収集関連資料の一元化をはかる。特に寛永期を中心とする17世紀に制作あるいは伝来した作品につき調査を進める。</p>	2025年度より2年間
<p>「1号館建築資料のアーカイブ化」（竹嶋） これまで蓄積してきた1号館建築にまつわる資料整理の成果をリニューアルオープンでの展示で紹介する。またその際には、外部機関への協力依頼も視野にいれ、より専門的な見地から現代日本建築史のなかに1号館を位置付けることを試みる。</p>	2022年度より3年間（継続） （本年度予算100千円）
<p>「館蔵工芸品の基礎調査」（竹嶋） 本年度は、館蔵品データベースの本格稼働を迎えるにあたって、館蔵の工芸作品の紙台帳のデジタル化を進め、情報を集約することを主眼とし、今後の作品調査の基礎とする。</p>	2025年度より3年間
<p>「住友春翠に関する基礎資料収集」（竹嶋） 2026年に没後百年を迎える住友春翠に関する基礎的資料を、将来的に展示に供することも視野に入れながら収集につとめる。初年度は、伝記『住友春翠』の記述も頼りとしながら、主として明治・大正期の大阪地域の新聞、雑誌記事のなかで春翠の事績を拾い上げる。</p>	2025年度より2年間 （本年度予算50千円）
<p>「館蔵洋画の調査研究」（野地） 館蔵洋画・彫刻に関しては、河久保正名や仙波欣平など、優品が収蔵されながら見落とされてきた作家・作品が散見される。また岸田劉生など近年の研究成果を踏まえ多視点からの見直しを推進する。</p>	2020年度より8年間
<p>「館蔵日本画及び洋画の基礎研究」（椎野） 館蔵の日本画及び洋画に関して、作家研究を推進する。特に春翠と交流をもった日本画家に注目し、近代における席画文化の諸相とその意義を明らかにする。</p>	2020年度より8年間
<p>「館蔵染織品の調査研究」（田所） 館蔵の染織品に関する調査研究を進める。特に用いられている染織技法の確認・整理や、収蔵経緯の詳細解明、また住友家でどのように使用されて来たのかといった点について、多角的な視点から調査研究を行う。</p>	2024年度より5年間
<p>「館蔵の近代南画を中心とした調査研究」（田所） 館蔵の日本画コレクションのうち、特に南画作品を中心に、調査研究を行う。館蔵品のみならず、同画家の館外作品の調査も積極的に行い、近代南画の在り方や画家同士の交流のようすなどを明らかにする。その成果は展覧会で公開を予定。</p>	2024年度より3年間

(2) 専門研究

館蔵品に関連する分野において、専門的研究を行い、その成果について、学会発表、紀要などの学術雑誌や図録での公表を行う。

テーマ	期間
<p>「中国先秦時代の社会と文化」 (小南)</p> <p>中国先秦時期 (主として二里頭文化から秦漢帝國の成立まで) の社会制度や思想文化について、出土文物と文献資料とを相互に参照しつつ、中国的特質を具えた社会の形成過程について検討する。</p>	2022 年度より 5 年間
<p>「中国近世の文芸と民衆信仰」 (小南)</p> <p>中国近世の民衆文芸について、文献資料と実地調査とにもとづき、民衆的な信仰と生活倫理のありかたについて探求する。現在は主として、盂蘭盆儀礼と目連による母親の地獄からの救済の物語りを中心にして、宗教儀礼と語り物文芸との関わりを調査、分析している。</p>	2017 年度より 3 年間 (科研費) 2020 年度より 4 年間 (科研費) 2024 年度より 3 年間 (科研費)
<p>「中国古代贈与儀礼の研究」 (山本)</p> <p>中国古代におこなわれた贈与儀礼について、古典文献に加えて新出の考古資料・文字史料も踏まえつつ、その歴史的展開と国家形成とのかかわりについて検討する。</p>	2022 年度より 4 年間 (科研費申請予定)

(3) 他研究機関との共同調査研究

館蔵品関連分野の研究を多角的に推進するため、他研究機関との共同調査を実施する。

テーマ	期間
<p>「木島櫻谷の調査研究」 (実方)</p> <p>今年度は櫻谷文庫所蔵資料のうち、マクリ資料を同文庫と共同で調査実施。継続中の櫻谷宛書簡類整理のまとめをめざす。また、関コレ研と進めてきた櫻谷収集中国書画の調査研究成果をまとめ公開する。</p>	2009 年度より継続
<p>「二条城行幸図屏風と寛永文化の調査研究」 (実方)</p> <p>屏風の様式研究に加え、武家公家儀礼や市井の衣・食・住の文化など屏風に描かれた内容を各分野の専門家と共同分析し、行幸を契機に花開いた寛永文化を読み解く。2026 年行幸 400 年記念展に向け進める。</p>	2025 年度より 2 年間 (本年度予算 400 千円)
<p>「中国古代青銅器製作技術の研究」 (山本・廣川)</p> <p>当館所蔵青銅器及び台湾中央研究院歴史語言研究所所蔵青銅器および鋳型を調査対象として、殷代から戦国時代にかけての青銅彝器製作技術の解明を目的とした研究を、歴史語言研究所、芦屋釜の里と共同で実施する。25 年度はこれまでの研究成果を総括しつつ、その内容にもとづいた展示を日台共同で開催する。</p>	2020 年度より 5 年間 (継続) (海外調査に関わる費用は科研費を充当) (本年度予算 1880 千円)

<p>「中国青銅鏡の高精度三次元計測データの解析」（廣川） 富山大学芸術学部と共同で実施している青銅鏡の三次元計測データについて、鏡形状の解析を実施する。25年度は主に漢鏡について解析を進める。</p>	<p>2025年度より5年間（予定） 富山大学研究代表科研課題の分担研究</p>
<p>「日本茶道文化史における中国金工品の受容と展開」 （山本） 日本中近世の茶道具のなかには、その淵源を中国青銅器にまで辿れるものが少なくない。これまで茶道文化史において正 当な位置づけがなされていない金工品を中心に実見調査等 を行い、唐物受容の新たな一側面を探っていく。茶道資料館 ・芦屋釜の里との共同調査研究。</p>	<p>2020年度より7年間 研究助成金申請検討中（2021年度 より三者協定締結） （本年度予算500千円）</p>
<p>「近代染織史の基礎資料研究」（森下・田所） 館蔵の染織作品を基本資料として、近代の染織品における 様式変遷ならびに技法を比較する。東京文化財研究所無形 文化遺産部と共同研究を行う。</p>	<p>2020年度より6年間（2015年より 継続）</p>
<p>「展覧会芸術研究」（椎野） 近代日本画における主題選択や表現様式を変容させた展覧 会の制度に注目し、同時代資料から「展覧会芸術」という 言葉の使用範囲と用法を探る。本年は春翠も名誉会員を務 めた巽画会に注目し、その活動内容を精査する。巽画会展 覧会の出品作の所在確認を進め、巽画会に焦点を当てる展 覧会の開催へと繋げる。</p>	<p>2020年度より8年間 文化庁文化財第一課中野氏と 共同研究。</p>
<p>「図像・出土器物・文献資料による古代東アジアにおける 饗宴システムの復元と比較研究」（山本） 東アジア古代国家の成立と深く関わる饗宴システムについ て、出土資料・文字史料の両面からその成立・展開過程を 追い、東アジア世界へ拡散する様相を広域的な比較検討に よって明らかにする。</p>	<p>2022年度より4年間 大手前大学研究代表課題の分担研 究</p>
<p>「周王の諸国統治の方策とその展開の形態——新出金文を 手がかりとして」（山本） 近年新たに発見されている金文史料に着目し、周王朝と諸 侯国との関係性の変化を、長期的視点から検討する研究課 題。</p>	<p>2024年度より3年間 東京学芸大学代表課題の分担研究</p>
<p>「吉田ふじを基礎研究」（椎野・田所） 洋画家・吉田博の妻であり、女流洋画家の先駆けでもある 吉田ふじをについて、遺族のもとに遺された基礎資料の整 理を行い、画業とその史的位置について明らかにする。</p>	<p>2023年度より5年間 東京文化財研究所の研究員と合同 研究</p>

4. 施設への対応

項目	内容	予算(千円)
泉屋博古館（京都） 改修工事 （2024年から継続）	築50年を経た泉屋博古館（京都）について、70年代を代表する建築として評価の高い青銅器館の永続的な建物保持を目指しながら、大阪・関西万博が開催される2025年春を目途に館全般の老朽化対策、展示室増設など来館者対応の改善および迎賓機能の強化、収蔵庫棟新設による美術工芸品の収蔵機能改善を実施する。 2024年2月着工、2025年3月竣工予定。	2,250,000 (2024～25年)

以上